



2010
11

鯉魚組

235

福原恒雄

ともだち風情

だれでも

虫の頃があった

う呑みにしろと睨めつけられたが

手も足も屈伸できるようになると

虫であったという名まえも

すがたも

きれいにぶっとんで

とべなくなった肢体だけで叢を出て辻を曲がる

頭のうえの

遠く近く 迷彩のきせつから

はる爛漫の飲めやうたえの

よだれが

べたべた

手を振ろうにも足を上げようにも

骨や肉が振れて痒い

もう虫の頃の呼吸はさっぱり思い出せない

しせいただしても舌や鼻の置き場所が見えない

ただね

いまでも飛蝗の足に捕まると

叢の悪寒だけとは 何の恨みだ

爛漫の突起のせいだ

なんて偽装のまちなてっぺんで

ともだち風情の睨みはごめんだよ

いままた妄想をかり立てて絵空事の辻を
曲がるどころなんだ

海の手紙 長崎半島から

東シナ海だった。空と風と海と、ただそれだけの夏の終わりの風景が広がっていた。太陽の光が粒子状になって降り注ぎ、海面に弾かれ、静かに乱反射している。太陽も海面も見えなかった。私が幼い頃に泳いだ海の上で、光は光を、風は風を、雲は雲を、波は波を、同じ自分を追いかけてこの風景が作られているように思った。

私たちは海に向かって細く突き出た半島にいた。小高い山の頂きに小さな墓地があり、その砂地からも光が沸き上がっている。傾斜地の低い木々のまわりで、鳥たちも蝶たちも、低く地面を這うように飛んでいる。私から離れたくないようだった。こんなにも高く、海面から離れた場所に立っているのに空に近づいている気はしなかった。

近くに燈台があった。「いつからここにお墓があったの」と問いかけられても、私は何も答えられなかった。この墓に父の、父たちや母たちが眠ってはいたが、あえて私は、父と母の遺骨はこの土地には納めなかった。私もこの風景のように、一つ前の世代へ、さらに前の世代へと、ただ同じ自分を追いかけて生きてきただけだと思った。

陸の上に立っているのに、四方が海に囲まれ、海の上に立っているように思えた。私の家系の、何百、いや、何千人かの父たちや母たちも、どんな思いで、この半島から私と同じようにこの海を見つめていたのだろうか。東シナ海という名前は好きではないが、晴れ上がった日には、この海の向こうに半島や大陸がくっきりと見えたのだから。

「まあいい海だね」と言われ、私も輝いていた水平線を探した。確かに海がゆるやかに膨らんで見えた。輪郭のぼやけた水平線が微かに盛り上がり、私に地球儀のような地球の形であると気づかせてくれた。四十五億年前、海がまるく広がったから、地球がこの形になったのだろうか。異国に続く海の歴史に気をとられながら、私は息子の手を強く握りしめながら歩き出した。

水に映る家

いつの時代も川の音が聞こえていた叔父さんの家。遅く生まれた者から先に死んでいった、それが叔父さんの家系だ。海へ続く細い川の縁に立つと、水の中から貌が、この家の死者たちの貌がいつも浮かんできた。はじめに嫁いですぐに娘が、数年後に、叔母さんが死んだ。洪水が起こる度に、少しずつ傾いていった家の中で、そうして叔父さんひとりが取り残されたのだ。

その川の流れは速かった。光が当たると、川底の砂や小石まで流れて来るのが見えたが、沈んでいた肉親たちの貌は透き通ったまま、流れてはいかなかったのだろう。水の流れる速度に合わせてることが出来ず、叔父さんの時代だけは遅れていったのだ。海辺に住んでいた船乗りだった叔父さんの友人の家も、息子たちが二人も海に消え、偶然にも同じ家系を辿った。

川から海へ、あの潮の流れもいつも速かった。優しい叔父さんたちの日焼けした体の中には、時代を刻む水が流れていたにちがいない。

家系を守っていたのか、家を守っていたのかはわからない。家族が死んでも家が残ればよいという血縁の歴史。家の中でひとりで水の音を聞いて暮らすしかなかったのだろう。それを叔父さんたちの不幸とは呼べない。不幸であることはひとりだけで作れるものではない。

水に映る家のどんな場所に立って、叔父さんは死者たちを探していたのか。速い流れであろうと、静かな流れであろうと、時代の境遇は水の流れに従うしかなかったのだ。光が降り注いでいた明るすぎる病室に呼ばれ、それでも「家を頼む」と、私の手を握りしめてきたが、それでも叔父さんもいつしか水に消えた。速く流れる水の音を聞きながら、兄である私の父よりも何年も何年も先に死んだ。

海流

暖かな潮の流れと冷たい潮の流れが混ざり合う、それが私の村の海だ。雨は多いが、温暖な気候で、村の人たちも、温かい人と、悲しげにうつむいて暮らしている人とが純粹に混ざりあっていた。

山の中腹の病院。その隣のいつも輝いていた墓地。雑貨屋と食料品店と魚市場と、簡素な町営の結婚式場の隣にも葬祭場、ただそれだけの小さな村だ。かつては町に続く単線の線路もあったのだが。

雑草が生い茂った錆びた線路の上を、風が一心に走り抜けて行った。警報も壊れ、誰も渡らなくなった踏切。遮断機もなくなったその踏切の前で、それでも私は海風が通り過ぎるのを待っていた。

遠い遠い昔、この踏切を渡ろうとした時、突然に遮断機が降りてきて 私と友人を遮ったことがあった。私は怯えて動けずにいたが、友人は慌てて走り抜け、その後で、この踏切からも、この村からも、消えていた。

廃線となり、もうこの踏切で私達を遮るものはなくなったが、本当はこの時代を遮るものを村にも残してほしかった。遮断機の前で 電車が通り過ぎるのを待つたび、山の中腹に、確かに友の墓が見えた時代もあったのだから。

善人の系譜

まひる、光の破片が痛々しく、叔父の背中につき刺さっている。老いるなら、美しく老いて欲しい。善人は身を滅ぼすと、死んだ祖父はいつも叔父を叱っていたが。

盲学校はこの春に退職した。『草原』の意味を教えられずに退職した。地平線まで草花が平らに広がっていたと、叔父がいくら教えても、子供達の触れる大地は小石だらけの、でこぼこの草原。

どこかに海の見えない家はないか。私にはやり残したことがおおすぎると、この村を歩き回るのが叔父の日課になった。かつての教え子たちの家を訪ね歩き、病名のない病人を探し出しては、自分の傷口を手当するように、家に連れ帰って来ようとした叔父。だが誰もが叔父の誠意を純粹に拒んだ。

それでも叔父は善人であることをやめない。哀れむ感情を他人に向けてはいけない。こころという容器のそのかたちも見えずに、叔父が一心に老いていく。今にも発狂しそうなほど、老いていくことに怯えている背中が見える。

血縁たちの海につづく白い砂地の庭先に、血の色をしたカンナが咲き乱れている。光が透けるほど衰弱した叔父の体が、弱々しい海風に押されまた外出する。どこかに私を待っている人はいないかと。

漂流

淡い冬の光が海面に雲の影を作っていた。雲は沖の方に向かって静かに移動し、じっと見つめていると、叔父さんの影が浮き上がってきた。かつて私に、この海に散骨して欲しいと言っていたが、その時、私は海が汚れると言って叔父さんを叱ったのだ。

入院を知っていたのに、見舞いにも来られなかった。あの日、東京から長崎の方に向かって手を合わせただけで、お通夜にも告別式にも帰って来られなかった。そんな私が、今、叔父さんの愛した海を見つめている。叔父さんに愛された海を見つめている。

水平線上に小さな魚船が見えた。雨が降り始めた。波は穏やかだったが、船は激しく揺れていた。船首が少しずつ水平線に消えかかっていた。難破した船のようだ。こちら側からは、地球の裏側へと落下し、転覆するようにも見えたが。

その時、私もあの船に乗っている気がしてきた。体が揺れはじめていた。涙がこぼれそうだった。私だって、この時間もこの場所も、この時代さえも見失って、ただ漂っているだけだと思えた。この村に帰って来ても、住む家はなかったのだから。

めまいがした。難破する船を向こう側からも見てみたい。沈没したら、海の中に逃げる道はあるのか。私も地球の裏側へ行ってみたいと強く思った。叔父さんの時代の裏側に隠されていたものたちをこの村で探し出したい。叔父さんの伝言もこの海に消えたのだから。

どこへ行くというあてもなかった。本当は、ただ一生を海の上で漂う生き方をしてみたかった。あんなに伝えたい事があると言っていたのに、その伝言も受け取れなかった。叔父さんの時代が見えなくなったのは、私がこの村のどこかを漂流していたからだろうか。

坂多瑩子

糸状藻

綿菓子のを領で

糸状藻をくるくるまわすと

そのさきに

しっぽみたいに

誰かが

ぼおっと暗い

暗いまま誰かさんがやってきて

きのうはいい天気でしたね

話しかけられると

月夜にあかるい水槽がひとつ

こんな夜には

糸状藻はつぎつぎと成長して

森のようになって

ひびの入ったたまごをいっぱい産む

もうすぐたまごが割れますよ

そういわれて

あたしは待ってるけど

たまご抱えた子どもたちが出たり入ったり

あっそれ

あたしのなんていえなくて

でも

待っている

ひびが少しずつひろがっていく音が聴こえているあいだは

で考えている

糸状藻ってなにして

誰かさんから聞かれたら困るから

佐藤真里子

蛍まつり

わたしとおんなじ夢のなかで

まだ待っているかしらと

心の笛を吹いてみる

森の奥深く

細い水脈が

夏草に見え隠れして

のびている小道

蛍の里

生と死のあわいがひらく

蛍まつり

蛍になったひとを訪ねて

みんなが集まってくる

わたしも

笛を吹きながら

なつかしいひとを

呼んでみる

やがて

辺りはとっぴりと暮れて

あちこちに見えてくる

蛍の点滅が

森をもっと暗くする

差しのべた手のひらが
闇に染まり
闇に消えてゆく
わたしのかたちを
ゆっくりとなぞっている
ひとつぶの蛍火が
わたしをくすぐる

白井恵子

夏のおわりに

高さを知っているのだろうか
頭上はるか鳥が一羽
真直ぐに進む
軽々と去るものを送るのは
いつも切ない
黄金の稲を広々と時が
空へぬけるあたりに印旛沼が横たわる
風がのぼる
水がゆらぐ
少年が一人、捕虫網をかかえて行く
子供のころを思い懐かしく眺めるが
白い道を歩く彼には まぎれもない今であり
シャツは汗で濡れている
トンボは捕まったのか
おいかけてきたのはなんだろう
稲は乾いた音をたて
重たい穂先を
先へ先へかしげていく
いつか少年が青年になり
ネクタイをゆるめ額の汗をふきながら
たちどまる
そのときもはるか上空を
鳥は風に乗って行くだろう

平田好輝

貫禄

わたしにははっきりと見えたので
わざわざ廻り込んで行ってみると
近所の知人が
そこにおびえて
身をひそめていた
おどけているのではなかった
わたしには妙にはっきりと
分かった

わたしの顔を見て
反射的にさっと
そこに隠れたのだ
隠れて息を殺していたのだが
いきなりわたしが廻り込んで行ったので
その男はどぎまぎしたのだった

「こんにちは」

「……」

「お散歩ですか」

「……」

わたしはもう失職してから十年のベテランだが
知人はまだ失業二ヶ月目で
まっ昼間
お散歩などして
とっさに口もきけなくなってしまったのだろう
ベテランの貫禄を見せて

わたしはにこやかにふるまい

言葉少なに立ち去る

知人は柱の影でまだ立ち竦んでいた

仲山 清

舟に乗ろうとする複数のわたし

ひかりを屈折させて

さらに屈折させて

そうしてこしらえた

舟なのだろう

底がぬけているようだが

浮いているから

舟なのだろう

乗ろうとするわたしの

背なかを吹きぬけて

わたしが舟に乗ろうとする

そうして次からつぎへと吹きぬけて

わたしは行列になったようだ

こんなには

なんと往復しても

向こう岸へはこべない

舟がもたないだろうし

積み残しがあるにちがいない

背なかを吹きぬけるくらいだから

舟など乗らずに

といいかけて

芦になった

次からつぎへと芦になって

けっきょく舟は岸を離れられず

わたしたちも岸にとどまった

ひかりを屈折させて

さらに屈折させて

二度と舟にならないように

たましいみたいなものを

やみへ沈めた

複数のわたしのあしもとで

Web鰐組<http://wanigumi.com/>

詩篇 VoicePoem 映画評 エッセイ 情報 写真 スライド オリジナル楽曲 NOTE 目録

●最近の掲載作品から

■吉田義昭

●小詩集『こどものための道具論』少年時代への旅1968～1971全20篇

ホッチキス ペンチ セロテープ はかり ロープ はしらどけい シャベる
かみねんど えんぴつ かぎ とりかご ナイフ コップ けしゴム ビン
そうがんきょう せっけん ほうちょう まんねんひつ ものさし

●小詩集『ノスタルジア市場』少年時代への旅1967～1968全10篇

原っぱ 遠くで呼ぶ声 眠る植物 竹の子供 水の一日 工作のじかん 秋の日課
寺の石段 青い梅の実 帰り道

●小詩集『影絵遊び』少年時代への旅1968～1969全11篇

蟻 影絵遊び 猫 影踏み 月の庭 夏の庭 蛇 屋根 夏の暦 白い朝顔 団欒

■根本明

●小詩集『チバ・シティ』全7篇

初夏 白金を浴びて港を 真問の伏姫の故に 鏡の塔の尖端で 浄土の鳥
チバ・シティ チバ・シティ2

■詩誌と作品 『すてむ』 青山かつ子「修行」 ほか

■歌謡曲（詞：七里）

兇状持ちの唄（曲：SOULIBOX 唄：辛鐘生／将太）

暗闇半兵衛（曲：SOULBOX）

帰れる夏があれば（曲：としたん 唄：三浦みどり）

冬の旅人（曲：SOULBOX）

銭湯のサルトル（曲：としたん）

素浪人残夢抄（曲：SOULIBOX）＝予定

■VoicePoem

Poem：新川和江 甲田四郎 野村毒和夫 高橋昭八郎 山中真知子 新井豊美
岬多可子 青山かつ子 岸田将幸 仲山清

（Voice：山中真知子 OriginalSound：TACHI／SOULBOX／NOVA ほか）

◆11月のVoicePoem 大国由美子（gui90作品） 石川道生（同）

◆歌謡曲およびVoicePoemの一部はWeb鰐組のほかに、音楽サイトSOUND TRACK
動画サイトYouTube（スライド付き）ほかにもアップしています。

受贈誌／今号の執筆者

■受贈御礼（～10月16日）

叢生170 ユタ20 hotel第2章25 芦屋芸術2 石川道生詩集『眩き部屋の幽霊』 パルナス9
林嗣夫『風が木の名を呼んでいる』 ゆんで創刊号 せっせっせ145 渡辺めぐみ詩集『内在地』
葵生川玲『詩とインターネット 一戦後からのまなざしー』 小林尹夫詩集『ツクツツカキ
ツク』 花束第VI集 新しい風18 焰86SPACE94 すてむ47 いちばん寒い場所62
青い階段93 きょうは詩人16 炎樹62gui90 ガーネット61 ココア共和国2・4 六
分儀37 この場所3 孔雀船76 随筆集『変な子』西岡光秋 る4

■今号の執筆者

吉田義昭●日本詩人クラブ／詩集『空にコペルニクス』『廣ランボー記』『空の透視図』『ガリレオが笑った』（日本詩人クラブ新人賞）『北半球』

福原恒雄●日本現代詩人会、日本詩人クラブ／「掌」同人／詩集『跳ねる記憶』『Fノート』『生きもの叙説』『おばあさんを盗む』『体の時間』『少年のなんでもない日』他

仲山 清●詩集『サイキ』『さらば、ろくでなし』『兇器L調書』『飛行の構造』

佐藤真里子●日本現代詩人会／「二兎」「胴乱」所属／詩集『風のオルフェウス』『寒い日 もっと寒いあなたの体内へと降りていった日に』『水の中の小さな図書館』『ラピスラズリの水差し』

白井恵子●「ユタ」同人／詩集『ゆうなるかぁん』

坂多瑩子●日本現代詩人会 日本詩人クラブ／「ぶらんこのり」「青い階段」同人／詩集『どんな眠りを』『スプーンと塩壺』『お母さん ご飯が』

平田好輝●日本現代詩人会、日本ペンクラブ／「青い花」同人／詩集『海は遠いものに』『恩師からの手紙』『ひと夏だけではなく』 小説集『孤独の舟』 随筆集『狭い部屋』他